
のほほん一夏くん

加賀見メグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のほほん一夏くん

【Nコード】

N3802BA

【作者名】

加賀見メグル

【あらすじ】

男性で唯一ISが操縦できる織斑一夏。

世界最強の姉を持つ彼が弱い筈が無い。

だが、一夏は姉とは違いひたすらマイペースにのほほんと我が道を行くぼやんさんだった。

これはのほほんとした少年と少女達が織り成す学園物語である。あとはほんのりとしたブラコン成分。

第一話

さて、どうしたものか。

まだ幼さが多分に残った相貌をへにや、と情けなく歪ませて少年

——織斑一夏は考える。

一夏の視線の先。

其処には童顔の女性が眼鏡の奥の目を回して倒れていた。

童顔の女性——山田真耶が纏っているのは、今や世界中で認知されている地上最強の兵器。
インファイニットストラトス

量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』はアリーナの壁に激突して、壁を大きくへこませていた。

一夏が身に纏っている量産型IS『うちがね打鉄』から真耶へと続く地面を抉った跡が、二人の間で何が起こったのか如実に表していた。

要は、真耶が何故か焦る。

そのまま一夏目掛けて突っ込む。

一夏が避ける。

勢いそのまま壁へ激突。

今へと到る。

本当にどうしたものか。

眉尻をへにや、と落として途方に暮れる一夏は、とある人物へとSOS信号を発信する。

「ちー姉さん、どうしたらいいの？」

『はあ……山田君も困った物だ。そのまま其処で待機している、一夏。すぐにそちらへ行く』

「はい」

一夏が見上げるのはギリシャのコロッセオを近未来的にしたようなアリーナの管制塔。

ISに内蔵されたスピーカー越しに姉の重苦しい溜め息が聞こえた。

程なくて件の声の人物がアリーナのカタパルトデッキに姿を現す。その女性は武者鎧に似た第2世代の国産量産型IS『打鉄』を着ている一夏に似ていた。

一夏のほにや、としたタレ目を（・ω・）キリ、とさせて頭一つ分ほど身長を高くした容姿。

漆黒の髪を一本に結わえた後姿。

身体全体から威風堂々と覇者のオーラを醸し出すその戦女神の名は織斑千冬。

一夏の実の姉だった。

千冬は鋭利な眼差しを更に鋭くして眼下で気絶している後輩を見下ろす。

そして。

すう、と大きく肺に空気を取り入れた。

「何をやっている山田君、さっさと起きないか！」

「ひゃ、ひゃいつ！」

芯の通ったその声はアリーナ中に良く響き、気絶していた後輩を叩き起すのに十分な働きをした。

ぴょん、とバネ仕掛けの人形のようにはね起きる真耶。

二人の上下関係が良く分かる構図であった。

一夏と真耶。

二人は千冬が陣取っているカタパルトデッキへとISを操り、帰還する。

片方は至って普通に、片方はどんよりとした影を背負って、と違いはあるが。

「まったく、これでは何のための入学試験が分からぬではないか」
「は、はい……」

嘆息した千冬に真耶はその童顔に不釣り合いな巨乳に反比例して小さくなる。

IS学園の入学試験の実技。

やる事は単純だ。

すなわち教員とのISでの模擬戦。

一概に新入生と云ってもその実力は千差万別。

ISに触れたことすらない入学生や、既に国家代表候補生として数百時間ISを運用している者。

その個々の実力を入学前に図るものとして一夏が受けた模擬戦は行われているのだ。

故に。

開始して直後に教員の自滅に近い形での模擬戦終了は、入学試験の趣旨を遂げていない事になる。

その事を当然知っているが故に真耶は千冬の漏らした愚痴が叱責のように聞こえてしまっていた。

縮こまる真耶を見て千冬は再度嘆息。

——まるで、これでは私が虐めているようじゃないか。

傍から見れば十人が十人とも思うであろう感想を心中で吐き捨て、千冬は口を開く。

「まあいい、山田君は私の代わりに管制を引き継いでくれ」
「えっとそれでは誰が織斑君の相手を……」

「ふっ、心配しなくてもいい。コイツの相手は私が務めよう」

「え……………ええええええ！ 織斑先生がですか！？」

「不足はあるまい？」

不足どころでなく過剰な提案だった。

織斑千冬。

彼女はISという兵器が台頭する中でまず名前が挙げられない事がないほど有名人物である。

第1回IS世界大会モンド・グロッソ総合優勝および格闘部門優勝者。

つまりISにおいて頂点を極めた女傑が彼女——『ブチュンヒルデ』こと織斑千冬なのだ。

断じてIS初心者の一夏が相手しても良い人物ではない。

「なあに、まだ尻に殻が付いたひよっ子の相手など造作も無い。それに案外『面白い物』も見れるかもしれんぞ？」

「え？ それは一体？」

「お前もそれで良いだろう、一夏」

「お手柔らかにー」

真耶の疑問には答えずISを展開した一夏を仰ぎ見る千冬。話を振られた一夏はほにやり、と人好きする笑みで答えた。

それに対して実の姉はもうすぐ高等学校に上がるうかという弟の幼く無防備な笑顔にやっていけるのであるうかと一抹の不安を覚えていた。

抜けるような快晴の下。

アリーナ上空で対峙する織斑姉弟。

片やぼやんと、柔和な表情を湛えた弟と、片や伶俐な美貌を携えた硬質な美貌の姉。

見れば見るほどに外見以外では正反對な姉弟であった。

共にISの基本機能であるPICで重力の鎖から解放され、展開されるISは共に『打鉄』。

「準備は良いか、一夏？」

「準備って云われても、今日初めて操縦するんだから想像するくらいしかやる事がないよ、ちー姉さん」

「十分さ。後、入学したのならば学園内では私の事は先生と呼ぶように、周りに示しが付かんのぞな」

「了解であります。織斑先生！」

元気良く、砕けた調子で敬礼をする弟に、姉はふっと頬を緩ませる。

たった一人の歳が離れた弟なのだ。

『ブリュンヒルデ』と恐れられる彼女も一夏に対してだけは甘い一面を見せる。

「……で、何回だ」

「んと、今丁度70回目」

「ふっ、十分だな。では始めるぞ！」

二人が構えたのを見計らい、管制塔に入る真耶から開始の合図が

成される。

『ではお二人とも、開始して下さい！』

瞬間。

一夏の『打鉄』が消えた。

否、消えたように見えるほど暴力的な加速を伴って移動したのだ。
宙に描かれる鎧武者の黒色の『ジグザグ』な軌跡。
イグニッション・ブースト
瞬時加速。

ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度
取り込み、圧縮して放出するという技能である。

その加速力は凄まじく。

初見であれば容易く懷に食い込まれてしまうであろう。

だが、瞬時加速には幾つかの欠点がある。

それは、使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変え
ることができず、直線的な動きになる点だ。

しかし、一夏は常識を覆すような変態的な機動を行なってみせた。

『い、イグニッションブースト！？ それに多段使用、なんでそんな
事が出来るんですかー！？』

官制室の真耶が思わず吠えた。

ISの最高峰モンド・グロツソでもなかなか見る事の無い瞬時加
速の『四回連続使用』。

擬音で表すならギューン、ギューン、ギューン！ であろうか。

一夏はその加速と機動をもってして人間が構造的に対処しにくい
下半身、足の下方より千冬に襲いかかった。

『打鉄』の手甲で覆われた手に持つのはIS専用の刀。
それを無防備な千冬に振りかぶり、

「まずまずと云った所か」

惚けなく同じ刀にて受け止められてしまった。

一夏の手に残ったのは激突の衝撃。

見れば姉は頭と足が天地を逆さまにして対処していた。

ISのPIC——慣性制御だからこそ出来る芸当。

「どうした、これで終わると思ってはいまい？ 何を突っ立っている」

変則的な鏖迫り合いの最中。

千冬は余裕綽々といった様子で一夏に発破を掛ける。

だが、次に開いた一夏の言葉に思わず動揺してしまう。

「ちー姉さん……かつこいい」

「なっ!？」

予想外。

こんな時でさえこのほん、とした弟の賛辞。

憧憬を含んだ一夏の視線に思わず千冬の背筋はムズ痒くなり、顔には朱色が散りばめられる。

確かに今の千冬は異性はおるか同性までも見惚れてしまうような凛々しさがあった。

「……煽てても手は抜かんど、とつと来い、一夏!」
「うん!」

其処から始まるのは地上最強の兵器ISでの殺陣。

試合場所は上下左右、何ものにもはばかれる事の無い空中。

時に剣戟の音をけたたましく打ち鳴らして、

時に瞬時加速を流れるように織り込ませて、
時に二人は螺旋を描きながら上昇して斬り合い、
それは到底世界最強とずぶの素人の戦いではなかった。
そして。
等しく決着は訪れる。

「終わりだな」

「うん、やっぱりちー姉さんは強いね」

「私のシールド残量を五割も削っておきながら良く云う」

一夏の『打鉄』に表示されるシールド残量の数値は0。
それは一夏の敗北を意味していた。

一夏の額に浮かぶのは玉のような汗。
荒い息。

それが二人の戦闘の激しさを物語っていた。

「ほら、立てるか、一夏」
「うん」

アリーナの地面で肩膝を付いた一夏に千冬は手を差し伸べる。
一夏は疲れながらもほにやり、と柔らかく微笑んでその手を握って立ち上がった。

「お疲れ様です。あの……織斑先生は織斑君にISの操縦を教えていたのですか？ 先ほどの操縦はとても初心者之物とは思えませんでした」

二人で連れ添ってカタパルトデッキに戻ってくると、真耶が出迎えた。

そして、労いの言葉と共に疑問を呈した。

対して千冬は苦笑。

ISを待機状態にしている一夏の頭にぼん、と手を置き質問に応える。

「なに、コイツは正真正銘素人だ。それは私が保証しよう」

「でしたら、どうして……」

「見て、覚えて、頭で反芻する。コイツがやっていた事は概ねそんな所だ」

当たり前のように云われ真耶の困惑は更に増す。

それだけ。

たったそれだけで世界最強と渡り合えるわけが無い。

何か云いたげな真耶に、千冬は一夏の頭一つ分低い頭頂部をぐりぐり、と撫でながら補足する。

「一夏、試合が始まってから終わるまで何回ほど私相手にイメージトレーニングをした？」

「んーと、試合前にしたのを除けて数えると63回」

「と、まあそういうわけだ」

ぽかーん、と口を開けたままで固まる真耶。

数瞬後、我を取り戻した真耶は質問を重ねる。

「あの織斑先生との斬り合いの真っ只中ですか？」

「はい。僕、そういうのは得意なんです。家の料理担当をやっているからかもしれないです」

確かに料理が滞りなく行える人は、腕を動かしながら頭で手順を考える事は出来るだろう。

しかし、刹那の間に勝敗が分かれてしまう勝負事でそれを成すというのは些か無茶が過ぎる。

試合時間は30分足らず。

その間で二桁の仮想試合を行いながら、脳内での結果を自身にフィードバックさせる。

明らかに常人とは逸してる思考形態。

もはや真耶には乾いた笑いしか出てこなかった。

「あはは、やっぱり織斑先生と織斑君はご姉弟なんですね」

「自慢の弟だからな」

「あーうー、ちー姉さん、そういう事はあまり人前で云わないで。恥ずかしい……」

臆面無く言う千冬に、頭を撫で続けられている一夏は恥ずかしがる。

少々ブラコンな気質の姉は弟の講義に取り合わず、かいぐいかいぐり丁度良い高さにある頭を撫で続けていた――

F a n f i c t i o n

I S インフィニットストラトス のほほん一夏くん

第一話

「あーっ」

ぺちゃん、と一夏は教室内の自分の席で垂れていた。頬を机につけて突っ伏す形で、心無しか顔も青い。

一夏の周りには女、女、女。

見渡す限り女子しか居ない異常事態。

否。

IS学園はそもそも女子校である。

なぜなら地上最強の平気であるISは『女性にしか使えないのだから』。

故にこの状況下の中で一夏が存在こそが異分子。

だが。

いつもであれば地に足が付いていないようなのほほんとしている一夏であれば気にはしない。

見世物小屋のパンダと大差ない状況でも、まあいいかで済ませられる心臓の持ち主なのだ。

一夏が弱っているその原因、それは。

「……くさい」

臭いだ。

ぼつり、つぶやかれた一夏の一言に両隣的女子がぴくり、と反応した。

一体何が臭いのか。

年頃の乙女としてはエチケットとして気になるフレーズではある。

意を決した右隣の女性とが垂れている一夏に声を掛ける。

「あの、織斑君だよね？ 史上初男性のIS操縦者ってニュースで流れてた」

「そうだよ」

「私は谷本癒子、よろしくね。それでえっとね、何が臭うのかな？ それに織斑君、なんだか調子悪そうだし……」

話しかけてきたのは明るい色の髪をした二つお下げの女生徒。

周囲の女子がクラスで唯一の男子である一夏に何時話しかけるか、互いに牽制する中での一番手。

水面下での戦いに先手を打ったのは谷本癒子であった。

「その……ね……」

「うん」

慎重に言葉を選んでいる一夏を促すように癒子が相槌を打つ。

言い淀んでいた一夏は意を決したように言葉を紡いだ。

「色んな香水とかが、ね。単品ならいい匂いなんだろうけど、入り混じっててなんだかこの教室すごく臭くない？ 女の子は気にならないのかな」

その一言。

たった一言で教室内の空気は非常に微妙な、それでいて気まずい物へと変化した。

IS学園に集められた生徒の多種多様。

国籍も様々であり、文化とて様々。

ならば香水の種類や付ける量とて様々だろう。

それらの強烈な個性の匂いが混じり合い、本人達の体臭とも絡み

合い、男である一夏にとって非常に辛い空間へと教室は化学反応していたのだ。

しかもその数、クラスメイト総数30から一夏を引いて29人分。

「あ、あはは……ま、まあその内、織斑君も慣れるんじゃないかな。

………というか今の一言で皆明日から自重すると思っけど………」

「そうかな？　そうだといいなあ………」

聞こえないように呟かれた癒子の最後の言葉は、一夏に届かず。ぐったり、と元気の無い一夏は、彼女の言葉に縋るように情けない声を出していた。

発育途上の一夏の低身長も相まって、その姿は少ない人数の女生徒達の母性本能を撥っていた。

姉譲りの端正な顔立ちもその一因であろう。

そんな中、一人の人物が行動を起こそうとしていた

その人物は、織斑一夏の幼馴染であり、6年ぶりに一夏と一緒のクラスになった篠ノ之^{しののへ} 篁^{はづき}。

彼女は垂れる幼馴染をなんとかしてやろうと思い、窓を見るがIS学院の教室は空調設備完備で窓は日光を取り入れるだけの物で開けない。

空調の換気を良くしようにも空調のボタンは入口の近くにあり篁からかなり遠い。

結局思い立ったは良い物の何も行動に移せないことが分かり、篁は歯噛みをする。

「ぐぬぬ」

元来の仏頂面が更に威圧感を増し、口元がへ字に曲がる。

そんな雰囲気放つ筈に周囲の人間は引き気味。

篠ノ之さんって怖い人なんだ、と筈の席近くの人間は第一印象を決定づけてしまったのであった。

あとがき

なんとなく暇つぶしにISのSSを書いてみた。

最強の姉が居るんだから弟もこれぐらい強いよね、という考えの下、この作品の一夏は強キャラです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3802ba/>

のほほん一夏くん

2012年1月10日00時53分発行